

## 実践事例

### 第6学年「サッカー」の実践を通して

江府町立江府小学校 山本 育朗  
日南町立日南小学校 河上 英仁  
日野町立根雨小学校 長井 理

#### 1. はじめに

##### (1) 運動の持つ特性

サッカーは、2つのチームがコートの中で入り交じり、主に足でボールを操作しながらパスやドリブルによってボールを進め、シュートをして得点を競い合うことが楽しい運動である。また、集団で同時にプレーすることから、相手に対するマナーやルールを尊重する態度、チーム内での協力など、運動を楽しむための社会的態度を養うことができる運動である。

児童にとっては、ボールを蹴る・パスがつながる・シュートが決まる・試合に勝つ…など、楽しく感じられる要素がたくさんあり、仲間と作戦を立て、励まし合い、チームに貢献できることで、より一層楽しさが味わえる運動である。しかし、足でボールを扱うことが難しいために児童の技能の差が出やすく、ボールが怖い・思うようにボールを操作できない・パスを回してもらえない…など「つまらない」と感じる要素もあり、技能差があってもみんなが楽しみながら向上していけるような練習の仕方やルール作りが必要な運動でもある。

##### (2) 児童の実態

郡内の小学校の傾向として、体育の学習や運動全般に対する興味・関心は男女を問わず高く、体を動かすことが楽しいと感じている児童が多い。しかし、ボール運動に対する興味・関心には男子が高く女子や低いという傾向が見られるとともに、個人差も大きく、二極化がはっきりしていると言える。

本単元を実施するにあたりアンケートを取ったところ、サッカーに関しては、ボールへの恐怖感や経験不足による苦手意識が他のボール運動に比べて強いようであった。

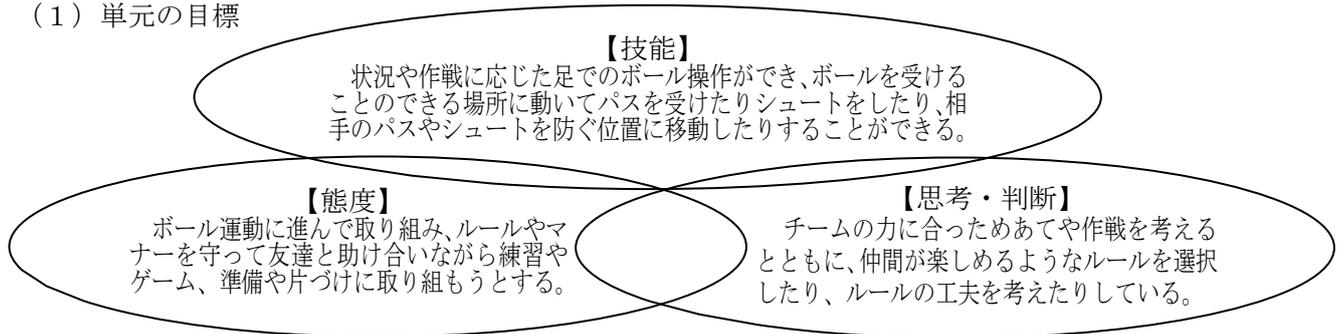
しかし、「サッカーの学習でがんばりたいこと」については、チームワークに関すること、技能に関すること、取り組む姿勢に関するものがほとんどで、勝ち負けもさることながら、チームワークの大切さやみんなできいしょに取り組むことの楽しさを経験的に捉えていると考えられる。

サッカーを苦手とする児童も「シュートをしたい」「ボールにさわりたい」と答えており、ボールを扱う活動を保障し、より多くの児童がシュートを決められるような場の設定を工夫することで、苦手意識を取り除くと同時に、楽しさを味わわせながら達成感をもたせることができると考える。

普段の体育では失敗した友達を責めたり、自分の楽しさだけを追求したり、途中であきらめたりする児童もいるので、失敗を責めない・認め合う・励まし合う・喜び合う…等の、情操面の“スキルアップ”も継続して行っていきたい。

#### 2. 実践について

##### (1) 単元の目標



##### (2) 学びへの働きかけ（指導の意図）

###### ○ボール慣れを意図したウォームアップの活動（効果的な指導）

- ・少人数であることの利を生かし、1人1個のボールを用いて楽しみながら足でのボール操作に慣れさせる。
- ・継続した活動の中で、自分やチームの成長が見えるようにする。

###### ○技能の向上を意図したミニゲームの工夫（効果的な指導）

- ・ドリルゲーム・タスクゲームを様々な視点から多数準備しておき、児童の実態や各時間のねらいに合わせて効果的に取り入れる。
- ・攻撃しやすい数的優位な状況の中で、楽しみながら技能を身につけていくことができるようにする。
- ・教具やルールの工夫によって恐怖心を取り除き、みんなが意欲的にプレーできるようにする。

###### ○コミュニケーションボードの効果的活用（学習課題の明確化と言語活動）

- ・言語活動（児童同士のコミュニケーション）と運動量確保の両立をねらい、コミュニケーションボードを活用して授業時間内での話し合いや説明の時間を短くする。

- ・前時の振り返りに見られる児童の気づきや思考を紹介することで意欲を高めると同時に、意図的に学習内容と関連させ、身につけさせたい力を明確にして児童への意識づけを図る。
- ・「わたしたちの体育」の挿絵を拡大掲示し、活動内容を視覚的に理解できるようにする。

### (3) 単元の流れおよび評価の計画

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
主なねらい	・学習の進め方を理解しよう ・ボールに慣れよう	・ボール操作に慣れよう	・ゲームに必要なボール操作を身につけて、ゲームを楽しもう					・チームに合った作戦を考えて、ゲームを楽しもう	・チームの作戦を生かしてゲームを楽しもう	
核となる学習内容	・学習の見通しをもち、サッカーの基本的なルールを知る ・「蹴る」基本動作を知る ・ボールを足で止める	・軸足を蹴る方向に向け、ボールの中心を蹴る	・周りを見ながらドリブルでボールを運ぶ	・相手をかかわりドリブルでボールを運ぶ	・ねらった方向へパスを出す ・パスを受け止める	・空いたスペースにパスを出す ・ボール保持者と自分との間に守備者をいれない位置に動く	・得点しやすい場所に移動し、パスを受けてシュートする ・ボール保持者や相手と手と手とで得点やパスを防ぐ	・いろいろな作戦を知り、試す	・チームの特徴に応じた作戦を考え、試す	・作戦に応じて、身につけた技能を生かす
学習活動 【わかる・できる・ためす】 ／ 【いかす・チャレンジする】	【ボールは友達タイム】 ・ボールタッチ ・リフティング ・ドリブル散歩 ・ドリブルマラソン ・フルーツサッカーボール ・ボール取りゲーム ・ボール蹴り出しゲーム ・ドリブルリレー ・サークルパス回し など									
	活動①スキルアップゲーム									
	・ボールさんがころんだ	・的当てボール押し出しゲーム ・コン当てシュートゲーム ・ハードルゴール(リレー) ・サッカーゲートボールリレー	・ドリブルリレー ①直線 ②スラローム ・コピードリブル ・ボール蹴り出しゲーム	・ドリブルボール運び鬼 ①フラッグなし ②フラッグあり 2vs3 ・1vs1 ドリブルライン突破ゲーム ・1vs1 ボールキープゲーム ・1vs1 ハードルシュートゲーム	・サークルパス回し ・隊列ジグザグパス ・三角パス回し ・全員パス ・フラフープ島渡し	・3vs1 パス回し ・2vs1 パス回し ・スクエアパスゲーム ・マンチェスターシュートゲーム	・アシストシュートゲーム ①トラップなし ②トラップあり ・2vs1 シュートゲーム ・3vs1 三角パスシュートゲーム	・4vs2 シュートゲーム ・4vs4 ラッキーゾーンゲーム	・4vs3 シュートゲーム	チャレンジカップ 2013
	活動② 力試しゲーム ・ロングキック大会 ・シュート大会	活動② アプリケーションゲーム ・ハードルたくさんサッカーシュートゲーム ・ナンバーズゲーム	・フリーゾーンドリブルゲーム	・フリーサークルドリブルゲーム	活動②ゲーム ロード・オブ・チャレンジカップ ・4vs4 クリッドゲーム ・4vs4 ツーコートゲーム ・4vs4 トライアングルゲーム			活動②ゲーム チャレンジカップ予選 ・4vs4 オーバルコートゲーム ・4vs4 ホーム&アウェイゲーム	・振り返り	
・振り返り	・振り返り	・振り返り	・振り返り	・振り返り	・振り返り	・振り返り	・振り返り	・振り返り	・振り返り	
評価の計画	関 ②	思 ①	技 ①	①	①	①②	②③	③	②	

具体的な評価規準	関心・意欲・態度	思考・判断	技能
	①練習やゲームに進んで取り組もうとしている。 ②ルールやマナーを守り、友達と助け合っ練習やゲーム、準備や片づけに取り組もうとしている。 ③運動をする場や用具の安全に気を付けて運動しようとしている。	①チームの力に合っためあてや作戦を考えている。 ②仲間が楽しめるようなルールを選択したり、ルールの工夫を考えたりしている。	①状況や作戦に応じたパスやドリブルをすることができる。 ②ボールを受けることのできる場所に動いて、パスを受けたりシュートしたりすることができる。 ③相手のパスやシュートを防ぐ位置に移動することができる。

### 3. 成果と課題

本単元では、ボールを持った動き、ボールを持たない動き等、各時間のめあてに応じて様々な場の設定やミニゲームを工夫し、児童が楽しみながら学習することを目指した。

本単元に入る前のアンケートでサッカーに対する苦手意識やボールに対する恐怖心を抱いていた児童が、本単元の学習を通して、サッカーを「楽しい」と言えるようになった。特に女子においては、最初動くことも出来なかった児童が、積極的にボールに向かって走るようになった。

#### 【ある女子児童の変容】

事前アンケート	3時間目	4時間目	6時間目	8時間目	9時間目
ボールがこわいし、ボールが回ってこないし、楽しくないから好きじゃない。	前までボールが苦手だったけど、ボールが少し好きになった。	いっぱいボールに向かって走った。もうボールにも慣れた。	サッカーが少し好きになり、みんなと協力してできた。	今日初めてシュートができて、みんなと喜びました。	ちゃんとボールに向かって走れた。

## ○課題の明確化

各時間のめあてを提示する際に、本時のめあてにつながる前時の児童の振り返りや気づきを意図的に取り上げ、授業の初めにコミュニケーションボードで紹介した。それによって、児童がよりめあてを意識して話し合ったり振り返りをまとめたりするようになり、児童の主體的な学習を促すことにつながった。

また、コミュニケーションボードは事前に教室に掲示し、前時の振り返りと次時のイメージ作りをねらった。その際「わたしたちの体育」の挿絵を拡大表示し、ミニゲームの進め方やルール of 視覚的な理解につながるようにした。見通しをもって学習に取り組むことができ、意欲を高めることにもつながった。



## ○ミニゲームの工夫

毎時間の初めに、少人数の利を生かして1人1個のボールを用いたボール慣れの時間を設定した。苦手な子への支援として、楽しみながら少しずつボールに慣れていく活動を繰り返し行った。自己の成長が感じられるよう指導者が見取って肯定的に評価していくことで、苦手意識を徐々に取り除いていくことができた。また、個人のスキルアップだけでなくチーム対抗のドリブルリレーやスクエアパスなどチーム全体の成長が見えやすいドリブルゲームも継続して行った。自分達の成長が数値から分かると共に、技能的な声かけの質も高まり、苦手な児童や失敗した児童、上達した児童への働きかけもよい意味で変化していった。

各時間のミニゲームも、めあてに応じた工夫を行い、特に、競い合う仕掛け（得点制や時間制限）が動きの活性化につながった。めあてを意識させることができ、動きについての気づきにもつながった。



また、得点が入りやすいこと、ボールを持たない動きを考えることを意図して、攻撃側が数的優位になるようにした。得点が入りやすいことで攻撃側のモチベーションは高まる一方、守備側もよく動いて相当な運動量となっていた。コート外でフリーに動けるラッキーマンも設定した。完全にフリーなプレーヤーを設けることで、時間的な余裕が生まれ一度立ち止まって態勢を立て直すことができ、コート内のプレーヤー全員がボールを持たない動きを考えてプレーすることができた。ラッキーマンをポストとしたり、ゴール前でのアシストにしたりする等、作戦の中でラッキーマンをうまく位置づけ、活用したチームもあった。

ゴールについてはコーンとコーンバーを用いて低いゴールを設定した。正確に蹴ることを追求でき、また、ボールが高く浮かないことが恐怖感を取り除く上で効果的であった。コーンを倒したりコーンバーに当たったりして入ったゴールについては無効とする等、ルールを尊重しようとするフェアな態度も見られた。

## ○言語活動の工夫

体育の学習における言語活動については、コミュニケーションボードを用いた間接的な意見交換と、気づきについての直接的な話し合いを想定していた。しかし、ゲームの中での声かけやアイコンタクト等も、「伝える・伝わる」という点から言語活動と捉えていくことができるとの指導をいただいた。そうした視点で児童の活動の様子を見ていくと、めあてを意識した発言によって児童の動きに変化が見られ、声かけが言語活動として機能していると感じられる場面もあった。また、話し合いを行う中で、児童の言葉から伝わりやすい表現が出てきていた。その言葉を拾って他の子ども達に返していくことも、めあてを意識づけ、技能習得の手がかりとする上で効果的であった。話し合っただけでは理解しにくい児童もあり、口頭で伝えるだけでなく試して共有化する時間を設定することも、時と場合に応じて必要であると感じた。

米子市で取り組んでおられる「ふりかえり板」にも、時間ごとの振り返りで取り組んでみた。振り返る際、本時のめあてに対してどうであったかという視点をもたせ自己評価させた。児童同士の話し合いの中で、自己評価が低い児童に対して「そんなことないよ」「ここがよかったよ」という温かい言葉かけも見られた。児童同士で見ている視点を与えることにつながり、また、苦手な児童に対して周りの児童の肯定的な言葉かけが行われることで、お互いに高まり合っていくという点において効果的であると感じた。



## ●今後の課題

単元構成において意見が分かれたのは、ドリブルを先にするかパスを先にするか…ということであった。パスは出す方と受ける方の技能的な差によってはつながりにくいという難しさもあるが、子ども達の捉えは「ドリブルよりもパスの方が容易にボールを進めることができる」ということであった。単元の流れとしてドリブルを先に学習するのか、パスを先に学習するのかということは今後の検討課題となった。

また、ボールを持たない動きの評価については、初期段階では「仲間からのボールを受けるまではできなくても、空いたスペースに動ければよし」とする等、評価規準を見直してみることもあってもよいのかもしれない。サッカーは様々な技能（ドリブル・パス等）が混在するので、ドリブルゲームで練習した技能をその時間のタスクゲームでは生かすことができないことも多々ある。全体を通して生きてくるという長期的な視点をもちながら、それぞれの時間で指導者が的確に見取って評価し、児童に返していくようにしていかなければならない。

児童の実態から、本単元ではドリブルやパスといった「蹴ること」についての技能の習得を中心とした単元構成を行った。サッカーに必要な技術的要素をスローステップで身につけさせていこうと考え、ヘディングやトラップの習得のための時間を設けることができなかった。今までも再三言われてきたことだが、各学年段階において身につけておくべき技能について指導者がしっかりと把握し、系統的に指導を行っていく必要性を改めて感じた。